View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

[図書館談話室] 2001年度私立大学図書館協会西地区部会研究会参加報告

著者	藤岡 豊
雑誌名	関西大学図書館フォーラム = Kansai University Library forum
巻	7
ページ	68-70
発行年	2002-06-28
URL	http://hdl.handle.net/10112/00022092

2001年度私立大学図書館協会西地区部会研究会参加報告

藤　岡　　豊

2001年10月５日に甲南大学で行われた標記の研究会に参加したのでここに報告する。私立大学図書館協会の西地区部会は愛知県以西の109校が加盟し、毎年研究会が開催される。今回のテーマは『学習と空間－新しい大学図書館の可能性を求めて』として、午前中は国際日本文化研究センターの井上章一先生による基調講演で自らの文献探索方法や図書館との関わり方についての講話。午後は加盟校からの３つの研究発表（大谷大学・関西大学・福岡大学）が行われた。

井上章一先生の講演が始まると、軽妙洒脱な話の展開に会場はなごやか。『美人論』や『愛の空間』など多数のユニークな考察で知られる風俗史研究の過程において、意識化されない形で人々が拘束されている隠された言説（社会的制度）を検証する資料を探すためには、図版や書き込みなどの書誌事項として取り扱われないような文献の特徴を手がかりに原資料を調査してゆくことが必要なため、一般的な図書館の蔵書検索や書店の出版図書情報の検索システムでは手に負えず、勘や人づての情報を頼りに文献を蒐集し記録を作り思索を深めていくことが多い。そのような中で現在の図書館の文献探索の能力には限界を感じているが、今後データベースなどの即時にアクセス可能な情報コンテンツが充実してゆくと、文献分析調査を飛躍的に容易にするような高度な探索サービスを図書館が提供するようになるのではないかと思っている。あまり表立って取り扱われることのない「裏街道文献」探しである自分のような研究者にも温かい多様な文献探索のあり方に道を開いてくださることを期待している、と希望を語られた。

国際日本文化研究センター　井上章一先生の講演

一方午後からの講演では、まず大谷大学の方から「真宗総合学術センター―響流館」という図書館・博物館・研究所などが合同になった新学術施設がまもなく竣工することの報告があった。図書館と研究施設や展示施設・遠隔講義施設がネットワークで有機的に連携し、デジタルコンテンツの制作や、その学内外への発信を行うメディアセンターとして機能するという。共同利用できるスペース以外に、学部学科ごとに管理利用を行う研究室もあるということだが、設備概要以上の具体的なサービス内容などの詳細はあまり明らかにされなかった。

次に我が関西大学から図書館閲覧参考課福元氏によって「電子図書館時代の学習空間」という演題で、ネットワーク上で展開するサービスの提供に向けた取り組みについての報告を行った。可能な限りの図書館サービスをホームページなどからオンライン提供してゆくという将来構想のもと、業務総合型の新図書館システムの来年度の稼動開始を目指してプロジェクトが急速に進行している。オンラインジャーナルやオンラインデータベースといった各種学術情報提供サービスを積極的に導入し、それらネットワーク情報源へのアクセスを可能にし有効利用を促すポータル機能を備えたリンク集は既に提供中だが、併せて、そこで得られた情報に基づいて一次資料を入手するための利用手続きを受付けたり、Ｅメールを使った各種連絡通知やＳＤＩ（論文速報）を含んだ電子カウンターを通じてのサービスも次期システムでは可能になる。ウェブを通して展開するサイバースペース上の図書館と、図書約175万冊・雑誌約24,000タイトルを収蔵する既存の物理的な構築物として存在する図書館とが軌を一にしてバランスのと

れたサービスを提供する状態を実現させるために、企画立案・予算申請から運用規則の整備などを担当する職員の体制や、それに係わる教員との連携、利用者に向けた情報リテラシー教育の拡充など、変容する学習・研究環境にまつわる各種問題についての対応に総力を挙げて取り組んでいる状況を取り上げて紹介した。これに続く質疑応答では、他大学図書館からは職員の体制についての関心が高く、課の単位で行う業務と各プロジェクトの業務との兼ね合いについての詳細を訊かれたり、業務のアウトソーシング化の状況に質問が集中していた。

他にも福岡大学からＮＩＩ（国立情報学研究所）の多言語目録に対応したユニコード準拠の蔵書検索とそのハングルや中国語簡化字表示についての研究発表があった。２年前に東アジア地域言語学科が発足したのをきっかけに、多言語目録データベースの整備が進められ、中国語やハングルの文献データやその入力操作について、データの汎用性と蔵書検索の際の一般利用者の利便性の調和をとりながら開発してきたという報告だった。

こうした大会プログラムについての私的な感想を述べる。昨今のＩＴ動向を見据えたビジネスモデルと同様、図書館事業においても「クリック＆モルタル※」というネット上と現実中の２つのサービス領域があって、そこへ今回の大会のテーマである図書館の『学習と空間』の問題がパラフレーズできる。「クリック」なる学習空間の事例、すなわち図書館施設から外部へ拡張した電子的な学習空間の問題が数多く提示されるのは、まさに今日的な状況においてプロブレマティックな領域だからこそなのだが、それでもまだ「モルタル」なる空間、つまり図書館施設自体について取り上げる事例が不足しているのではないか。ＩＴ化を前提とした「モルタル」、つまり電子図書館時代の図書館施設というのも、重要な問題ではないかと気になった。

一般的な来館型の図書館についての環境も、コンピュータを設置して（あるいはネットワーク環境を提供してコンピュータは持参するという方法もあるが）、図書館内で電子学術情報と冊子体資料と併せて相乗的に利用してもらうというサービス形態が理想的であって、決してウェブのサービスに移行して図書館の建物が消滅・縮小されるというものではない。それにふさわしい学習空間についてはまだ検討

関西大学図書館 閲覧参考課福元氏による報告

されるべき余地があり、そういった事例をもっと大会では収集すべきではなかったのか？ 研究会の当番校の大会運営は並々ならぬ苦労が絶えないと思うが、折角の全国規模の研究会なのだから、講演だけでなくても、アンケートによる事例収集とそれを羅列した資料配布を行うだけでも、まずまず有用なバリエーションが提出され情報交換できたように思うのだが。

もっとも、そういう内容が全くなかったわけではない。今回の研究会のプログラムとは別になるが、会場となった当番校の甲南大学図書館が電子メディア情報の提供サービスに焦点を当てて開館した「サイバーライブラリ」を休憩時間中に見学できたのは幸いだった。この３月に竣工した新設学舎である５号館には、「学習情報プラザ」というコンセプトで、自由利用パソコン室やマルチメディアゼミナール室を（大学情報処理センターの管轄で）設置するとともに、それらと協調してサービス提供を行う「サイバーライブラリ」という分館的な位置づけの図書館のサービス拠点を立ち上げたのだ。

約４万冊の社会科学系の図書・雑誌・マルチメディア資料を所蔵し、パソコンコーナーではＣＤ－ＲＯＭデータベースや、「日経テレコン21」や「朝日ＤＮＡ」といったインターネットで学内向けに提供されているデータベースの利用ができる。また、カラーレーザープリンターの利用や、さきの自由利用パソコン室において学舎内での利用を条件に貸与しているノートパソコンも持って入ってきて、室内の情報コンセントに接続して利用できる。

学内共有型の情報サービスがあると、「もう図書館に行かなくてもいい」といった居ながらの利用ができるメリットを押し出すことができるが、人足が

甲南大学５号館内に新設されたサイバーライブラリ

遠のいて活気がなくなるというデメリットも生じる。ここの場合、図書館があえて居ながらの状態になってしまう学生が多く集まるインテリジェントビルに「出店」して、本部の図書館にはないアドバンスなサービスを展開するという事例と見られた。

他に考えられる形態としては、そういう分館は置かずに既存の建物の中でこうしたサービスを提供するが、図書閲覧スペースとは別室にするなど距離を置くことで、電子機器の操作音などの騒音に配慮をしているようなところもあるだろう。高槻キャンパス内のデータライブラリーのような分散した図書館サービスの拠点を担当する私としては、分散型か集約型かといったサービス提供の在り方とその企画立案の経緯や運用開始以降の運用上の問題や利用件数等の実績などは気になるところで、他の図書館に詳細を訊いてみたいところだ。またそれ以外にも、図書館内での電子機器提供の在り方についても、単にオンライン情報サービスを提供しているというだけではなく、電子メールの送受信もできるとか、ワード・エクセル・パワーポイントなどの文書作成ができるとか、カラープリンターが使えるといったサービス提供についての問題は、学生利用者の立場からすると自習時間の有効活用ができるかどうかに係わる問題であり、図書館や情報処理センターなどの機関が共同して対応していかなければならない問題だろう。このような事例と問題を確認する場として大会が機能すると良かったはずだ。先の「サイバーライブラリ」のような取り組みがすぐそこにありながら、具体的な発表や検討がないというのも不思議な話で、同じように来館型の電子図書館機能の拡充を構想する図書館は期待していたのではないだろうか。図書館の場合、一般的な商業戦略「クリック＆モルタル」とは違って、施設内においてＩＴをどのようにレイアウトするかという、言わば「クリックｉｎモルタル」（私的な造語）については、検討の意義があるテーマだと思う。

拙論はさておき、このような各種の問題意識をインスパイアされたという意味では、良いきっかけだったのかもしれない。これから機会があれば積極的に発言したりエッセンスを吸収できればと思う。

なお、本大会においての本学の発表についての詳細は、講演者である福元氏が私立大学図書館協会に提出した発表内容原稿を参照されたい。

※（用語解説）「クリック＆モルタル」

インターネット上のWebサイトによるサービスと、現実の店舗や流通機構におけるサービスを組み合わせるネットビジネスの手法を指す。自宅などから製品カタログや在庫状況を確認したり、遠隔的にリモートでオーダーを提出できるインターネットによるウェブサービス（「クリック」）の良さと、伝統的な営業実績のある現実の店舗網（「モルタル」）におけるサービスの良さを複合して相乗効果を持たせる商業戦略が、2000年ごろからこの言葉のもとに注目された。

（高槻キャンパス事務室　ふじおか　ゆたか）